

『過去、絶対に途絶えることはないと言われていた技術の発展はとうの昔に終わってしまった。進展を忘れたこの世界は足踏みばかりを繰り返して西暦3000年を迎えようとしている。』

しかし無事に節目の年を迎えることはなく、ほぼ全世界へ大災害が振り撒かれた。この災害は過去に経験した以上の被害を生み、散々研究してきた技術をもってしても、自然の気まぐれな脅威も恵みも征することは不可能だとまっさらな世界の中で思い知らされる。

それでも泥人形のように打ちひしがれる奴等ばかりではなかった。この被害を脅威と捉えず恵みなのだと思ひ取り、また一からのスタートを踏み出そうと動き出す者がいたのだ。まともな意思のない者には、明るい意志を容易に受け入れる行為に時間は長く掛からなかったようである。

.....

その後、今現代我々の住む世界へ創り替わり、過去の歴史よりも丁寧に、かつ短い期間で幾つも完成させてきた。

それは、文化であったり医療であったり技術であったり、すべては過去より良いものを。その一心で全世界の人間が生き続け、沢山の繁栄と僅かな失敗を何度か繰り返すことで発展を止めることなく、僅か100年でおおよそ完全に復興を成し遂げた。

この歓喜すべき日が誕生したのがおおよそ十五年前。どんなに人類

が技術を発展させようと、結局は人間が解明することの出来ない箇所が必ず生まれてきてしまう、と偉い人々は口を揃えて同じことを言う。それでも今を生きる人々には特に支障はないようだった。今日ではどこかしこにでも人工物が混じっており、皆忙しそうに動き回っている。

こんなにも平穏な世界が今までもこれからも永遠と続いていくことはもう決まりきっていることだろう。 ∴ 』

.....

すっかり集中しきって読んでいた手のひらに収まる本を手放し、その手で顔を覆った。浅く息を吐きつつ視線は遠くへと移っていく。部屋やベッド、治療服までもが、いつ見ても真っ白で統一され、この上ない無機質感と清潔感を持っていた。

背伸びをして組んだ手を上へと持ち上げた。その瞬間にこつ、という音と一緒にほんのりと痛みを覚えつつ、頭上にあった機械の存在を再確認させられることになる。前に聴いた、白衣を着ている男の人の声を思い出していた。

「この機械はあなたの意識を身体と一旦切り離すためのものです。この治療法では、あなたの意識を仮想空間に置いて、病気の治療を行っていく、という方法を執っています」

身体のラインに沿った黒のズボンに白衣の内からシャツを覗かせる、担当医の男の人は、一枚の紙を見ながら教えてくれる。

「もしあなたの身体が食事の摂取を嫌がっても、あなたの意識は摂取を拒まない可能性もあるかもしれません。折角このように沢山の治療法に信頼が持てる時代です。前例が少ない病気でも可能性を見つけることは出来るでしょう」

机に向き合っていたその人は手に持つ紙を机に置いて、診察椅子に座る僕の手を取った。その手は少し温かくて、一緒に頑張っている、という言葉に裏は無いみえたかった。

やがて窓の外はすでに赤みを帯びてきた。またいつもの治療の時間がやってくるんだと頭上の機械が音も出さずに喋りかけてきたような気がした。さて、そろそろ時間だ。大きく丸いフォルムの機械がすべてを覆い、視覚を、聴覚を、意識までも身体と切り離していくらしい。辺りは暗く、深い海の底へと沈んでいくような感覚、ゆっくりと目を瞑った。

.....

段々と明白になる意識に連れられ真つ暗な中をふらりと歩いて行けば、目先には薄らに光の漏れる扉が見えてくる。急ぐことも立ち止まることもしない。僅かに閉まり切れていない扉には、白地に細く筆記体で『quiet room』と書かれた板が紐に吊られている。ドアノブを引き、部屋の中へと裸足で踏み入れようとする。真つ青な空間にどうも違和感が漂っているのは、白ばかりを見ていた眼が驚いているのだと勝手に決めつけることにしていた。めまいに似た

歪みが収まるのを待って、やっと部屋に入ることが出来る。きゅ、と口をつぐみ、呼吸を奥底で止めるような感覚。物音を立てないようにしたくて、足音も呼吸の音も立てずに少し離れた壁際のベッドへと倒れこんだ。人が2人寝ても狭さを感じない広々としたそこだけが、白くきれいにシートも敷かれている。真つ青なこの空間の中でも特にお気に入りの場所で、とある時間以外は片時もこの場所を離れることはなかった。

その時間も間もなくやってきてしまうだろう。

「—— ———」

どこからか、拍子を置いた耳につんざく音がした。その音の鳴る理由は分かりきっている。

「ああ…もうそんな時間か…」

何度も繰り返した治療の時間が訪れることを、棚上の置き時計の針は無慈悲にも寸分間違えることなく教えてくれる。この時間になると壁の一部に、ぼっかりとトンネルのような形の穴が開く。その先にも青が続く。穴が開くの見届けると、転がり落ちるようなベッドから這い出たは、のそのそと手は壁伝いに進んで行く。少し薄暗くて明かりも等間隔に埋め込まれ、閉塞感を持たずこの道はあまり好きじゃない。おぼろげだった意識も歩くごとに目を覚ます頃には、治療室と称したダイニングルームに辿り着く。たった一人で使うには広すぎるような部屋に机と椅子が揃えられ、1つの机に、湯気の出ないきれいに盛り付けられた料理達が机

の上に並んでいる。きつと僕が口にするのを待っているんだろう。洋食に和食に、サラダや汁物まで、一貫性はないものばかり。適当に椅子を引っ張って腰を下ろす。ちょうどサラダに添えられたフォークを手に取り色味のある野菜へと突き刺し、口にする。

「……」

はつきり言って不味い。食感はサラダなのに味がしない、むしろ苦味しか感じられない。机に肘を寄せ、片手はフォークを持ち、もう片手は

口元に添え、ぐっとそれを飲み込んだ。どっかの医者が言ったことがでたらめにしか聞こえず、むしろ食事なんて出来るとは思えなくなる。毎度毎度、何かしらの変化があったりなかったり、何度治療に挑んでも結果は同じ、身体も意識も食事を拒んでいることには変わらないようだった。

こんな日々をほとんど欠かすことなく続けている。起きているときは死んだように、眠っているときは生き生きと。昼夜を逆転させたような、他人から見れば全く正反対の暮らしをまだまだ、延々と過ごしている。

そんな日々が止まるのは想定外のことだった。

コンコン、コンコン

単調な音が思わぬ来客を教えてくれる。いつもと変わらないはずの、ベッドの上での耳鳴りばかりの無音状態はかき消されてしまっ

た。眠りかけていた意識もすっかり覚醒してしまつて、急いで起き上がった。何処からかの干渉の合図の音がしてから体感的には1分ぐらいの時間が経った気がした。何かの間違いであつて欲しいが、何かいけないことがあつたのかもしれない。他に誰もいない独りきりの困つたところだ。何か不安があるときに、共有なものにも出来ない。不便だと今一度実感すると同時に、見えない物への恐怖が積もりだす。来客だつたら待たせる訳にはいかないだろうし、僕みたい

に不安でいっぱいになっているかもしれない。反応の帰つてこない部屋の主に怒っている可能性だつてある。もしそんなことになつたら困るのはここで生きている僕だろう。考えはどんどん急かされ、扉へ裸足をしっかりと地に押し付け、一步一步大股に扉の寸前まで向かつた。

「え、つと、君は…?」

思わず声に出してしまつた驚嘆を、そのままつなげてしまうように、扉の前に立ち尽くしていた女の子に向けて声を放つた。まだ視線を合わせるのにも怖くて、顔より下あたりに視線を向けてみる。服装は僕と似ていて、Tシャツに膝までのズボンを履いている。勝手に自分と同じような患者なのかも考えたが、今なお返答が返つてこないままでは何も進まないだろう。

お互いの呼吸だけが微かに聞こえる。僕の世界からひっそりと零れる明かりだけが、足元に背の低い影を二つ作って、静けさだけがこだましている。

「……隣の病室、から来たの。道に迷っちゃって」

次の行動を何か起こそうかと考え始める前に、初めて女の子の声を聴いた。綺麗に透き通り、耳に残り続けるその声に、僕の視線は、相手の目を捉えた。後ろ髪は肩あたりで揃えられているが、前髪は目に掛かって視界を遮っているようだった。それでも中で僅かに見える眼には、どこかきらきらとしたものが見えた気がした。

「同じような空間がほかにもあるんだ、そこへは帰れるのかな」

「まだわからない。帰れないの」

そう教えてくれた。その言葉の中にはいくつか要約すべき言葉がしっかりと詰まっている。人と会話するのは随分懐かしく感じた。

その言葉はどうもあやふやでどこか幼い雰囲気を感じ出している。もしかして自分よりも若いのかも知れない。そんな子を暗闇にひとりぼっちにしてしまっていたと思うと、良心を刺される気がしてくる。いつのまにか自分の意志は固まっていた。

「じゃあさ、ここで過ごしていくのはどうかな」

身体一つ分しか空いていなかった扉を蝶番向こうの壁まで開き、部屋全体の青を見せるため身体の向きを変えてみる。目に入った女の子の表情は、困ったような、でも、興味津々に部屋を見ていた。すぐに僕と目を合わせたかと思えば、部屋へと視線を移し交互に見比べて一言。

「いいの？」

もちろん断る理由もなく、首を縦に振った。君は大事な初めての来客だ。苦手なものは少しあるものの、それ以上に自分が気に入ったものばかりを集め残した宝箱みたいなものだ。気に入ってもらえればなんてことも思ったがまだわからない。左手を壁に伝い、壁際をゆっくり進んでいく様子を、僕はその場を動かさず目で追っていた。

扉のあった壁を曲がって、穴も開いていない、ただ青いだけの壁を緩やかな波を手で描きながら、あたりを見回す君の姿は初めの印象よりも随分幼く見える。まだ君は進むことを止めるつもりはないらしいのだけど進む道はもうない。棚が並んで通せんぼしてしまっている。そこらには、壁に空の額縁が、下を見ればぬいぐるみやおもちやがガラス越しに見えた。中でも一番気になったものは、どうやら置時計のようで、その小さな手を伸ばしていた。

「あ、それは」

思わず声を出してしまった。君の背中が大きく跳ねたのが申し訳なくなつたが、致し方ないだろうと心の中で言い訳をしながら、ひとつ探し物をするに決めた。君が何か本らしきものを手にベッドに乗り込むのを横目に、下段のおもちや箱に手を伸ばした。中には乗るのは様々で、積木や列車の形を真似たもの、地球儀なんかもある。そして、探し物の球の機械も。この空間で集めたモノが詰め込まれていた。

中から引つ張り出した球体に不備がないかくりと回してみる。前と変わるところはないだろう。電源もちゃんと入った。くりりと

踵を返して、ベッドの側面を背に、腰を下ろした。読んでいたであろう本は近くに放られ何を始めるのか気になったらしい。うつ伏せのままこちらを見ていた。カチカチとボタンを押す音がよく聞こえる。

するとどうだろう、部屋一面に、星屑を真似た小さくたくさんの光が映った。以前一人で試した時よりも綺麗な気がして一人勝手に楽しんでた。背後の君は眠気に負けてしまったらしく。鈴灯の中、自分の腕を枕代わりに眠っているようだった。僕も眠ってしまおうか。機械の電源を切り、ベッドに頭を任せ、そのまま目を瞑った。

彼女も目が覚めればいなくなっているはず。そう思うと寂しさが湧いてくるが、眠ろうという気持ちで埋めてしまえば、押し出せみたいだ。ここからはもう、思い出せない。

.....

おはよう。久々にはつきりと目を覚ましたような気がした。ここでは目が覚める時間に決まりがなく、ひたすらに惰眠を貪って時間を潰すことが多い。そのせいで気分がよくない状況に陥るのはいつものことだった。それなのに今日はどうやら違うらしい。気怠さもなく綺麗に目が冴えている。ベッドの上で体を起こし、手を前に組み背筋を伸ばした。陽の光と曇りの模様が窓越しに見える。消えない光に疲れてきて、またベッドに体を任せた。目をつぶっていても光が透ける、窓に背を向ける形で寝返った。こうしていれば勝手に時間は過ぎていくことだろう、早く夜になってしまえと

意識の底では考えていた。そのまま、また眠ってしまえそうだ。背中をほのかに温めていた陽と別れた。

.....

またいつものように、暗がりの中で目が覚めた。起き上がった覚えもなくただ突っ立っている。足取りはしっかりと、自分の世界を探し始めた。それから、ぼんやりと記憶を元に扉の近くまでやってきた。

ふと扉の前で思い出すのは来客のことだった。珍しく光も漏らさず閉じきっていることに違和感を持ちながら、ドアノブを捻る。

「おかえり！」

扉を開けると同時に飛び込む景色は、声を上げた君の存在だった。手には無題のアルバムと、白のチェキを手になっている。

「これ、つくりたい」

そう食い気味に話す君と、部屋の変わりように追いつけずに、とりあえずアルバムとその上に乗せたチェキを受け取った。

「ちよ、ちよっと待って！」

片手で扉を閉め、積木や、列車を通すレールが環状に置かれている床を踏みしめた。見るにどちらも未完成のまま僕が来てしまったらしい。パラパラとアルバムな中身を眺めるが、中に写真は入っていない。それでアルバムを作りたいと言い出したのかと理解した。

「いまから？これを？」

アルバムを閉じ、君のほうを向いて問いかけた。こくこくと頷いて光の射している方向を指さしている。いつもはカーテンを閉じていたせいで陽が上がりつついるとは知りもしなかった。急かすように手を引く君に付いていくまま、カラカラと軽い音を立てて、外らしきものへの出入り口は開いた。お互い裸足のまま芝生の上で、まずは一枚。君の視線がチェキに向いた瞬間を写した。体験したことのない感触。緑色の何かに焦点を合わせ、また一枚。夢中になっていた内に君の姿は遠くに動き、道路のように舗装された道を辿っていた。君のいるあたりに焦点を当て、シャッターを切る。そして追いつこうと君の元へ走った。髪で隠れがちだった眼がレンズ越しに近づいた。

折角のシャッターチャンスはすぐに遠のき、どこか遠くを走る後ろ姿だけが写る。そんなことを続けて、ポケットに突っ込んだ写真が増えてきた。それでも君の興味と体力は尽きることなく、桑園とやらまで足をのばした。施設のような、自然体のような、廃れてしまつて桑の葉が生い茂る状態になっている。そのせいでそのまま立っていれば顔あたりは隠れてしまう。そんな中に君の後ろ姿があった。「…急に連れ出したりしてごめん」

さっきの明るさとは変わってどこか落ち着いている君の声が前方から聞こえた。

「構わないよ、アルバムを作ってみたかったのは僕もだから。」  
今さっき撮った思い出が手元に形として残されている。折り曲げずポケットに閉まった写真に触れつつ、振り向いた君の姿を目にし

た。

「わたし、もうすぐ退院するの」

桑園の葉の揺れ重なる音に混じりながら、はっきりと聞こえた。所詮は機械の中にせもの過ぎないのに、質感も、風の鳴らした音まで本物のように作られている。

「それは、とてもおめでたいことだ、ね」

まともな言葉は出なかった。ただ相手の言った言葉を頭の中で反復しては、背筋にはびこる緊張が周りの音を遠ざける。

「だから、一緒に最後の思い出を作りたくて」

不器用に、でも嘘のないはにかみを君は見せた。

「それじゃあ、ちゃんとお祝いしよう。アルバムも完成させなきゃ」

どうにも落ち着かないまま淡々と言葉を吐いた。楽しい思い出を作ったのは僕も同じはずなのに、泣きそうになってきた。お互い口元しか見えていない、でも自分の声の震えには気づかないフリをした。現実と同じように陽も傾いている

「そろそろ日も暮れるし帰ろうか」

今度はこちらが手を引く番だ、桑園を出て同じ道を辿った。

しばらくして、開放しにされていた自分の居場所が目についた。

ふと手に触れていた感覚がなくなった。背後にいるはずの君の姿を目で追った。

「あそこがわたしの家」

そういつて少し離れた場所にある小ぢんまりとした赤い屋根の家屋を指さした。どうやらつながりはあるらしく初めてそれを知った。

そのまま家と呼ぶそこへと君は向かい、自分もベッドに寝転がろうと急いだ。

部屋に戻り、ベッドの端に座り込む。ふと見下ろした先にある途中で完成していなかった積木も、列車を倒れさせたままだったおもちやも自分なりに立て直した。これでまた先を越されても大丈夫だろうと、ベッドの上でまた朝を待ち、隣人への再開を期待した。

.....

額縁の中で笑う彼女は今の僕を見てなんて言葉をかけるだろう。置き時計のあったところに置いた、赤い屋根の家を模した積木に、隣にはあの白いチェキを立て掛けている。それを使う人もとうとういなくなってしまうのは寂しいものだ、チェキを見て思った。壁に飾られた額縁に手を伸ばした。ずいぶん後に人間ではないと聞いたが、写真を見ても信じられないまま今に至る。ラフな格好も、僕と彼女のための空間も今日でお別れだ。

床は青ばかりで、おもちやは転がっていない。カーテンを全開にすると陽の光を浴びた。もうここに戻る必要はなくなった。ドアノブに手をかけ、扉を開く。いつもとは全くの別物の病室に似た真っ白の空間に出たと思えば、意識は目覚めた。主治医に治療は成功した、と言われたのが、一か月近い前のことになる。

そうして、今の忙しい現代社会に溶け込んでいる。今では病弱で食事も出来なかったとは思えないだろう。都心のだ真ん中、人間と人工物が共存する世界の一部に落ち着いた。友人からの『もうすぐ着くから』との知らせを横目に、周りを見渡した。機械も人間も思い思いのことをやっている、待ち合わせのために作られた、小動物を象った銅像の前で誰かが僕の前を通り過ぎていった。その後ろ姿があの日の記憶に重なって見える。

銅像から離れ、その後ろ姿を探した。人が随分と多い。きっと君だろうと決めつけて追いかける誰かは、全く振り向かない。立ち止まってもくれない。それでも諦めきれなかった。わずかに生まれる隙間を縫って追いかけて続け、その場に立ち尽くした。

ひらひらと後ろ姿で左右に揺れる手に、しっかりと意志は伝わったと分かったからだ。少し経って友人からの着信に気付き、急いで引き返した。

—— あとがき ——

はじめまして。まさか小説書くことになるとは思っていませんでした、ひよっこです。

実は初執筆となった今作、「quiet room」は既存の曲からの二次創作なのです。味覚障害の男の子と、生い立ちほぼ不明の女の子が出てます。ちよつとずつ設定を拝借しまして完成までこじつけました。終盤は自己解釈です。本家も聴いてね！

それじゃあポップについてでもお話しましょう。今回のポップは各々自分でつくっております。デザインのモチーフとしては序盤に出てきたプレートです。絵が全くないって？ シンプルが良いっていうからね、しかたないね。

というわけでプレートよりも見てもらいたいの表紙です表紙。この文化祭をモチーフにしたポスターが多く描かれるのですが、その中で優秀賞を獲得した人物にお願いしました。本当にありがとうございます。

最後に、今作をお手に取っていただきありがとうございます。来年こそ、完全オリジナルの小説を書きたいと思えます。

ここまで読んでいただきありがとうございました。